

2 味土野のガラシヤ玉子

弥栄町

明智光秀の次女として生まれた玉子（あるいは玉）は、十五歳のとき細川藤孝（幽齋）の子息忠興と結婚します。父同志がもと足利氏の家臣であり、信長の仲媒で成立した結婚でもあったことから、まわりから祝福された結婚だったといえます。勝龍寺城（長岡京市）に夫とともに住んだ二年間は、玉子の人生で最も幸福な時期であったといえましょう。

ところが一五八二年、父光秀が主君信長を討つという本能寺の変が起こり、父が「天下人」となった期間はすぐ終わり「逆臣」の娘の名が玉子に冠せられることになりました。秀吉をばかった夫は、数人の男女の従者とともに味土野に玉子を幽閉します。

味土野には「おさぎの岡」という平坦な丘があり「女城」と呼ばれる城跡があります。ここが玉子が幽閉された地であるとされています。玉子が幽閉された地であるので、のちに「女城」の名が付けられたのでしょう。谷を隔てて向かい側の山には「男城」があり、警固の従者はここに話していたといえます。玉子は一年十か月をここで過ごします。

この間に玉子に大きな影響を与えたのは、侍女清原マリアでした。清原家は儒学を伝える学者の家だったのですが、マリアの父も母もキリシタンの教えに共鳴し、その影響でマリアは生

まれてすぐに洗礼を受けたとされます。そして十二、三歳のころ、養育会という捨て子を集めて育てる会に入会したといえますから、マリアはキリシタンとしての信念に裏打ちされた積極的な女性であったのでしょう。人里離れた地での閉じられた生活は、マリアの影響力を大きくしたものと考えられます。玉子自身にとっても、味土野の地での不遇な状況は、遂に玉子の心の自立と、キリスト教信仰への傾斜を生んだと考ええます。

玉子には、もともと儒学の素養がありました。それは、清原家が著名な儒学者であり、また、細川氏や明智氏、なかでも細川氏は清原家と深い結び付きがあったためでもありました。その清原家でさえキリシタンに共鳴したという経過を見ていた玉子には、キリシタンは遠い存在ではなかったのです。

のち大坂玉造の細川邸に入れられた玉子でしたが、ここでも外出は許されず、監禁状態の中で、マリアから洗礼を受けガラシヤの名を授かります。関ヶ原の合戦に際し、徳川方に付いた細川氏の邸を守って、玉子は石田方の軍勢に囲まれて自刃して死を迎えました。人質という立場も完遂し、自らの信念も貫徹したガラシヤは、前近代の人権抑圧の中で女性の生き方の一つとして、見事な事例を私たちに示してくれます。

（田端泰子）



ガラシャ玉子隠棲地跡

メモ●「ガラシャ玉子隠棲地跡」は、KTR宮津線峰山駅より車で約40分